



第28号 (2023年 冬号)

発行日 2023年2月13日

信州大学教職支援センター

Shinshu University
Center for the Teaching Profession

教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【障害を学ぶこと】

昨年12月に、北海道の障害者グループホームで結婚を認める条件として不妊処置が提案され、それを受け入れていたカップルが十数組もあったという報道があった。これが少なくとも十数年前から行われていたということ、この施設の運営責任者が(私の主観的な印象では)悪びれることなく、結婚は支援できるが育児までは支援できない等とカメラの前で話していること、さらに第一報は比較的大々的に報じられたにもかかわらず、その後の報道はあまりないことなど、考えさせられることが多い。報道されていることが事実のすべてではないだろうから、今ある情報だけで問題を過剰に取り上げることは避け、柔軟に考えたいとも思うが、私は、むしろ、報道よりもっと大変なことが背景にあるのではないかと感じている。それは、こんな報道に接しても、何故か多くの人が仕方ないと思っていると感じてしまうからである。何か事情があるにちがいないとか、知的障害のある人に子育てなどできるはずがないと決めつけ、障害のある人の当たり前を考える側に立つのではなく、不妊処置を提案した側の言い訳に同調しているのではないかということである。

人は、誰でも「当たり前」の生活をする権利を持っている。この「当たり前」は、時代や地域によって異なるが、例えば、戦争のない平和な環境で、仕事や学習をし、家族と共に自分らしい生活をしたということなどは、誰が望んでもおかしいことではない。子どもだとしたら、学校に通い、友達と交流し、将来の夢を持ち、いくつもの壁にぶち当たりながらも自己を高めていく、それは、決して贅沢な、的外れな望み事ではないはずだ。にもかかわらず、障害があるからという理由で、「当たり前」が変えられてしまう。

障害者の結婚率はきわめて低い。その中でも知的障害がある人はダントツに低い。結婚率だけではない。1979年までは義務教育への就学率も低かった。国の制度として障害のある子どもの就学猶予や就学免除の規定が続いていたからだ。現在でも、大学への進学率も就業率も高くない。「当たり前」を望んでもそれができない。それがこの国の現実なのだ。

これは他の人の話ではない。私たちのことなのだ。例えば、年老いて、生きていくために支援を受けることが必要になったときだって、何を食いたいとか、どこに出かけたいとか、そうした望みを持つことはごく当たり前のことだろう。それができなくなるということなのだ。

この報道の少し前になるが、「公立小中発達障害8.8%」という報道もあった。実はこの見出しは正確ではなく、この数値は、通常学級に在籍する子どものうち行動面や学習面に著しい困難があると学校がとらえている割合である。つまり、学校が対応し切れていない子どもが8.8%程いるかもしれないということなのである。

この子どもたちにとっても当たり前の学校生活を送ることが保障されなければならない。そのためには、この子どもたちに手厚い個別指導を実施することも必要だが、それよりも大切なのは、学校が、教室が、教師が、そして授業が変わっていかなければならないことだ。

教職課程での特別支援教育の必修は1科目1単位に過ぎないが、これは教員にとって決して「+α」の専門性ではない。障害を学ぶということは、どちらの側に立って物事を考えることができるかという、人間の尊厳について学ぶことなのだ。



庄司和史 (教職支援センター 教授)

初級CST養成講座を振り返って（前半）

令和4年12月17日（土）松本キャンパスにおいて、令和4年度初級CST認定修了審査会が開催されました。CST(Core Science Teacher)とは、学校現場で理科教育の中核的役割を果たす教員のことで、信州大学では長野県教育委員会と共同でCSTの人材養成に取り組んでいます。4年間CST養成講座に参加し、修了審査に挑戦した皆さんのコメントを紹介します。【紙面の都合上、今回は前半のみ紹介します!】

【岡部茉伊子さん（農学部）】

CSTを終えて

4年間取り組んできたCSTの活動が終了しました。外部での活動にはあまり参加することができませんでしたが、修了審査会に参加することができました。桜井先生をはじめとする、CSTの先生方の計らいのおかげです。ありがとうございました。

子ども達に理科の楽しさを感じて貰うためには、まずは私達自身が実際に体験し、様々な現象に対する楽しさを感じる必要があります。CSTの活動はとても楽しかったです。講義とは違い、先生や他の学生とコミュニケーションを取りながら取り組めることも楽しさの一つでしたが、大学生になっても、不思議だなと思える現象に出会うことができたり、今まで学んできたことから仕組みがわかったり、学びに対する楽しさも感じることができました。ここまで続けてきてよかったと思います。

修了審査会では一緒に取り組んできた農学部の学生や、他の学部の学生の発表も見ることができました。皆素晴らしい発表で、いい刺激を受けました。

【落合健吾さん（農学部）】

CSTでの経験は変え難いものでした。理科教育にあたって、教育実習など通常の教職に関する講義とは別の視点を獲得できました。また、実験等に関して、実際に教育現場でご指導されていた先生方から、工夫の仕方や生徒の反応などを1、2年生の頃から詳しくお聞きできることは非常に貴重な経験でした。

【國信耕基さん（農学部）】

私は大学に入る前、理科の授業での実験は確認作業の側面が強いと思っていました。しかし大学に入って研究をしたことで、理科の授業は生徒自身に考えさせ、見出させることが非常に重要であると強く実感しました。そこで、生徒に考えさせるならば自分もより深く考えなければいけない。そのヒントをくれたのがCSTです。CSTでは生徒に興味を持たせる工夫や見やすい配慮、そして何より科学の面白さを再確認することができました。今のところ教員になる予定はありませんが、今後研究をしていく中でさらに科学の面白さを見つけていければと思います。ありがとうございました。



【高橋みのりさん (工学部)】



CSTに参加できて、とてもよかったと思っています。一番は、教材について考える時間となったためです。自分自身が面白いと感じる現象や生徒に伝わりやすい見せ方などをたくさん学びました。生徒が「楽しい」や「なぜ?」と興味を持てるようにすることや生徒が「わかった」と理解できるようにすることを大切にしようという意識が強くなりました。また、CSTでは小学生や中学生と交流する機会にもなりました。自分の感じることと子どもたちの考えることが異なることを知り、積極的に話しかけ理解することに努めました。4年間を振り返って、CSTは私にとって貴重な機会となりました。ありがとうございました。



【土江田優貴さん (農学部)】

CSTの活動について、日常生活で目にする物事や現象を自分たちで触れることで、改めて科学の面白さを感じることができた。大学生の私たちでもそれら現象に驚かされたり、考えさせられたりすることがあり、とても新鮮な気持ちだった。私は卒業後すぐに教員になるわけではないが、教壇に立った時には、自分たちも体感したなぜ、どうしての気持ちを持ち、それらを探究する楽しさを子どもたちに教えられる教員になりたいと思った。修了審査会については、自分と同じ分野でも違う授業の展開を見ることができ、勉強になった。どうしても最初のうちは教科書通りの授業になってしまいがちだが、自分が面白いと思うことを伝える授業ができるようになりたいと思った。これでCSTの活動は終わってしまうが、ここで経験したことやその時の気持ちを忘れずに生活していきたいと思う。最後に、桜井先生をはじめ、下澤先生にはこの4年間大変お世話になり、ありがとうございました。



【新妻史絵さん (農学部)】

CST修了審査会では、研究授業で行った実験の授業のうち、前時の復習と実験方法の説明の部分のみを発表しました。今までは前時までの復習をしてから授業を始めた方が良く考えていましたが、復習からではなく、冒頭に本時で学ぶ現象を見せて生徒自身に問いを抱かせてから展開していくという授業について審査員の方から話があり、生徒も教師も夢中になれる授業を行うにはもっと柔軟に授業構成について考える必要があると感じました。また、私が扱った内容は教科書に記載されていたもので、どうしたらより伝わりやすくなるのかということは常に考えながら授業を行えたと思っています。その一方で、危険な部分はないか、他にもっと良い教材はないかをしっかり検討できていなかったと反省しています。既に教材として扱われているものを使用して授業を行うというのも一つの方法ではありますが、自分で教材を作成し授業を行えば、生徒にも教師にも印象深い授業を行えるのではないかと思います。

教職支援センター11~2月の動き

- CST養成プログラムワーキング(11/10)、
- 第2回教職支援センター運営委員会(11/15)、
- 農学部と近隣教育委員会・協力校等と教育実習等にかかわる懇談会(12/16)、
- 初級CST認定審査(12/17)、
- 長野県総合教育センターとの理学部振り返り会(12/20)
- 教職支援センター拡大打合せ(12/23)、
- 長野市教育委員会と連携協議会(1/17)、○教職セミナー(2/1)、
- 松本附属学校園と松本キャンパス教職課程設置学部との連絡会(2/13)





教職実践演習を担当して



11月に行った教職実践演習では、教育事務所が作成した課題のある授業(録画)を子ども目線で視聴し、意見交換したあと、実際の小学校高学年の授業(録画)を見てもらいました。

演習の冒頭で、教育実習を終えた皆さんに、「①主体的な場面を作ること ②対話的な場面を作ること ③ICT機器を活用した場面を作ること ④計画通りに授業を進めること ⑤子どもの関心に関心を寄せること」の中で、授業の中で一番大事にしたことは何ですか?と尋ねました。多くの皆さんが、「②対話的な場面を作ること」に手を挙げていましたが、演習後のアンケートには、次のような記述がありました。

- ・課題のある授業を子ども目線で見ること、様々な問題点が見つかり、子どもに注目することの大切さを改めて知りました。教育実習では、計画通りに授業を進めることにだけ夢中になってしまったなと反省しました。
- ・子どもが疑問に思うことや関心を持っていることを大切にしていきたいと思いました。授業を組み立てるうえで、子どもの目線になることに必要性を感じました。
- ・机間指導をする中で、子どもの考えを見取り、共同追究の場面で誰を指名すれば全体の考えが深まるのかを考えると、自分にはない考えでした。子どもが何を考えているかということに関心を持つ重要さを感じました。

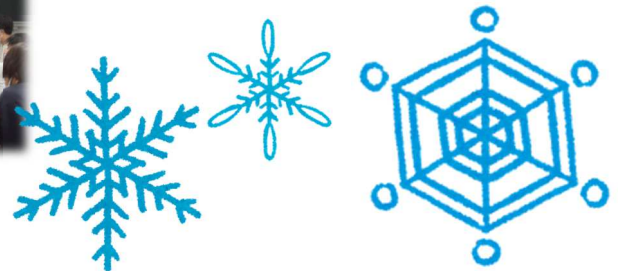
演習の中で、「⑤子どもの関心に関心を寄せること」の大切さを感じた方がたくさんいて、うれしく思うと同時に、頼もしく思いました。

先日、松本市内の教頭先生と、「小中学生の学力向上に向けて」というテーマで話し合う機会がありました。その中で、「活動があるけど、学びがない授業が多い」「授業のどこがツボなのかを、全職員で共有していく必要がある」といったご意見がありました。実際の授業ではまだまだ、「⑤子どもの関心に関心を寄せること」よりも、「①主体的な場面を作ること ②対話的な場面を作ること ③ICT機器を活用した場面を作ること」等が目的になっている授業が多く見受けられます。

よい授業ができるようになるためには、よい授業の具体的なイメージをはっきりと持っている必要があります。まずはよい授業を探し求め、出会えたならしっかりと味わい、そのイメージを深く焼き付けてほしいと思います。そして、「⑤子どもの関心に関心を寄せること」を大事にしながら、子どもの豊かな育ちが感じられる授業を行ってほしいと思います。現場で皆さんと会える日を楽しみにしています。



(松本市教育委員会 学校教育課
学校支援室 指導主事 合内誠宣)



編集後記

今号は、庄司先生ご退職前最後の号となり、先生の想いのこもった巻頭言をいただくことができました。また、長く編集を務めてきた河野も同じタイミングで異動となります。これまで読んでくださりありがとうございました。次号からは、横嶋先生が編集を引き継いでくれます。新しい風にご期待ください!(広報担当 河野桃子)

